

「危ないから、一列で歩いて。」

これは、今年度、登校班の班長になった兄の言葉です。私は毎日、片道二キロ以上の道のりを歩いて登校しています。今まで優しくった兄が急に、並んで歩く事に対して、注意をするようになりました。私は、そのような兄をいつしか嫌だと感じるようになりました。

ある雨の日、かさをさしながら、いつものように友達と並んで歩いていました。兄の「危ない。」

という言葉ではっとしましたが、自転車にのった中学生とぶつかってしまいました。転んで、かさが曲がり、膝から血が出ていました。

「助けられなくてごめんね。」

といつも怒ってばかりの兄が悲しい顔で言いました。その日の夜、兄と母が、私がけがをした事について話をしていました。兄は、

「注意をしても聞いてくれない。僕のせいだけではないけど、僕の力不足なのかもしれない。注意する事でみんなに嫌われて悲しいし、本当は班長なんかやりたくない。」

と言って泣いていました。兄がそんな風に言うなんて思いもしませんでした。その後、私も母と話をしました。まず、今回の事故の原因について考えました。私は、せまい道を二列で歩いていた事、友達との話に夢中になり、前をよく見ていなかった事がいけなかったと思いました。そして母は、事故と安全は常に紙一重で、自動車との事故は、運転者側だけでなく、歩行者側の問題もあると言います。その意味について少し考えてみました。確かに、事故の要因は一つではありません。今回の事故も私の不注意に加えて、雨でかさをさしていたため、周りが見えにくくなっていた事、中学生側の不注意もあったかもしれません。このように、少しくらい大丈夫だろうという思いから、その時の様々な状況が重なり、事故になるのだと思いました。

では、私にできる事は何か、自分なりに考えてみました。それは、自分自身の毎日の行動だと思います。その中で、兄が私に嫌われても、私を守ろうとしていた思いに気づき、涙がでました。そして、目の前の楽しい事しか考えていなかった自分を恥ずかしく思いました。私は、みなに堂々と注意ができる兄の事をとてもほこらしく思いました。次の日から私は、兄の命令にしたがいました。私が一列で歩くと、周りの友達も一列で歩くようになりました。

私は今回の事故から、自分自身が守らなければならない交通ルールについて、身をもって学びました。兄と登校できるのは後半年です。これからは私が、低学年の子を安全に登校させる立場になります。兄の思いを私も引き継ぎ、みなが安全に登校できるように、まずは私自身が、登校中は、必ず一列になり、周りをしっかり確認しながら歩く事から始めていこうと思います。そして私も、兄のように、相手を思い、注意ができる勇気ある人になりたいと思います。